

# 数学オリンピック財団から

## 1. 国際数学オリンピック (IMO), 日本数学オリンピック (JMO) 小史

IMO は全ての国（正しくは、国と地域）の数学的才能に恵まれた若者を見出し、彼らの才能を伸ばすチャンスを与えると共に世界中の高校生達が政治的対立とは無関係に、「数学」という国境を越える人類の共通語を通じて友情を深め、国際交流の輪を広げることを目標としています。大会は、毎年夏休み7月の「2週間」、各国の「持ち回り」で開催します。参加各国は、これに備えて、国内コンテストなどを実施して6名の代表選手を選び、団長、副団長たちと共に主催国のIMO大会へ派遣します。

このIMO大会は、すでに50年近い歴史があります。第1回大会は、1959年にルーマニアが主催国となり、ハンガリー、ブルガリア、ポーランド、チェコスロバキア（当時）、東ドイツ（当時）、ソヴィエト連邦（当時）を招待して開催されました。以後、ほぼ毎年参加国の持ち回りで開催され、1968年の第10回大会では12カ国、1978年の第20回大会では17カ国となりました。この頃から参加国が急激に増え始めて、日本が初参加した第31回北京大会では54カ国、昨年の2005年のメキシコ大会では91カ国、514人の選手たちが世界中から参加し、名実共に世界中の数学好きの若者の祭典となっています。そのIMO大会への参加資格は主催国からの招待状が必須です。

また、主催国はIMO開催期間の約2週間分の大会費用は勿論のこと約90カ国より参加する各国の選手（6名）と、役員2名（団長、副団長）分の食・住の一切の費用を負担しなければなりません。これは大変な負担ですが先進国の中では、日、米を除き殆どの国では国家行事として国が負担しているようです。

従来から数学の振興に尽力されてきた協栄生命保険株式会社（当時）の故川井三郎名誉会長（野口前理事長と同窓の数学科出身の先輩）が北京大会での選手たちの健闘ぶりに感激され多大のご寄付を下された。さらに同氏のご尽力で、協栄生命保険株式会社（当時）、富士通株式会社、株式会社アイネスなどから多大のご寄付を頂き、このご寄付を基金として1991年3月20日文部省（当時）所管の財団法人「数学オリンピック財団」が設立された。第1回の日本数学オリンピック（JMO）はその年の1月に予選、2月に本選が行われた。2003年には、この財団の力を結集してIMO大会を日本で開催することが出来た。

2006年には、JMOは第16回を数え、第46回IMO大会に6名の選手を派遣した。

## 2. 第47回IMOスロベニア大会における日本選手の成績

7月11日開会式、18日閉会式で行われた大会には、90ヶ国、498人の選手が参加した。日本の成績は、国順位7位（過去最高）、金メダル2、銀メダル3、銅メダル1と全員メダリストに輝いた。個人の成績は次のとおりです。

メダル	氏名	所属校	学年
金	大橋 祐太	筑波大学附属駒場高等学校	3年
金	渡部 正樹	筑波大学附属駒場高等学校	3年
銀	伊藤 佑樹	灘高等学校	3年
銀	片岡 俊基	三重県高田高等学校	2年
銀	吉田 雄紀	灘高等学校	2年
銅	越川 皓永	筑波大学附属駒場高等学校	2年